

沖縄におけるカンショ茎葉部利用系統の特性

出花幸之介・〇大見のり子¹⁾上地邦彦・照屋亮

(沖縄県農業研究センター・¹⁾現沖縄県中央卸市場)

【目的】

カンショ茎葉部は、他の野菜類と比較しても生産性が大変高いことが知られている。栄養機能性の高さも加味すると、野菜や機能性食品原料としてのカンショ茎葉部は有望な素材である。沖縄県内では野菜用カンダバー(甘藷葉)として根強い需要があり、スーパーなどで販売されているほか、自家菜園における生産量もかなりあり、炒め物など各種料理として日常食されている。

そこで、沖縄県農研センター育成のカンショ有望系統「沖育 01-1-7」など5系統などを用いて、茎葉部の生産性や機能性を検定し、沖縄県に適応する茎葉利用系統を選抜した。

【材料および方法】

島尻マーヅ(暗赤色土)の圃場に、一区(3.6 m²)に20株、3反復の試験区を設定した。基肥はイモ配合肥料を50g/m²(N:4.5g, P₂O₅:4.5g, K₂O:9.0g)施用し、シルバーマルチの畝間90cm、株間20cmの植え穴に2006年7月1日に植付けた。

8月1日に地上2cmの位置で茎葉を除去し地上部の再生を促した。ナカジロシタバなどが発生したので、農薬散布を2回行い、切り株から発生してきた茎葉について9月28日に1回目の収穫調査を行った。

収穫後に、再度地上2cmの位置で茎葉を除去し2回目の株揃えを行い、切り株から発生してきた茎葉について11月25日に収量調査を行った。

収穫調査時に、葉や茎などを風乾あるいは凍結し、フォーリンデニス=マイクロプレート法によりポリフェノール含量を測定した。

【結果および考察】

9月収穫では、沖縄育成系統は茎葉重が重く、茎が徒長せず短く揃いが良く、野菜としてツル先を収穫する場合の収量も多く、ナカジロシタバなどの食害も少なかった。また中でも沖育 01-1-7は野菜としての収量特性が優れていた。

沖育 01-1-7, 02-1-15, 02-1-11は、「すいおう」などと比べて茎葉本数が多く、野菜用として利用する場合の葉重や葉柄重が「すいおう」などの2~3倍もあり有意に大きかった。沖育系統は野菜用として収穫した場合、葉柄の割合が全体の半分近くあり、特に「沖育 01-1-7」などでは葉柄重が大きく、葉重の比率が低い傾向があった。

しかし葉の乾物率は葉柄の2倍以上もあるので、葉の乾物重は葉柄よりも重くなる傾向があった。葉の乾物量では品種・系統間の有意差が検出されなかったが、葉柄の乾物量では沖縄育成系統は「すいおう」などより重い傾向にあった。

葉のポリフェノール含量では「すいおう」は他の品種よりやや高かった。

11月収穫の結果では、茎葉重、野菜重、野菜利用率において統計的に有意な品種・系統間差が検出されなかった。沖育 01-1-7の茎長は最も短く、そろいが良かった。10月下旬頃から花序が発生する系統があり、カンショの花序は野菜用としては不適だと考えられた。そこで花序が1個以上発生したツルを発蕾ツルとし、株当たりの発蕾率を算出した。沖育 02-1-11や「すいおう」は発蕾率が高く、沖育 01-1-1や 01-1-7は低かった。

11月における生の葉と葉柄のポリフェノール含量は9月に比べてやや低下していたが、葉の乾物におけるポリフェノール含量の変化は少なかった。